

十方山林道（細見谷林道）すなわち
緑資源幹線林道 大朝・鹿野線 戸河内・吉和区間
（二軒小屋・吉和西工事区間）
環境保全に関する意見書・要望書集

< 資料集 No. 7 >

2004.12.20、緑資源機構の地質調査報告書に対する意見書
及び、上記意見書の添付資料「細見谷地域十方山林道周辺の地質」

（宮本隆実・古川耕三）

2005.07.05、林野庁長官・緑資源機構・座長中村慎吾宛（地質調査意見書）

（宮本隆実・古川耕三）

2005.07.29、上記に対する回答

（回答者：委員会座長中村慎吾・緑資源機構森林業務部長安藤伸博）

新道新設部分においても、植生に与える影響が注目されるようになってきた。しかしながら、大規模林道化のもう一つの大きな問題点が”地盤の脆弱さ”にある、ということ間違いはない。それにもかかわらず、緑資源機構ではきちんとした地質調査は行っておらず、また、環境保全検討委員会に地質の専門家は一人も加わっていない。

宮本・古川の両名は、自らの調査結果「細見谷地域十方山林道周辺の地質」(日本地質学会発表および林野庁提出済)を踏まえて、道路改変への評価を行い、また後日、検討委員会に地質の専門家を加えること等の要望も行った。

両名の出した結論は、”現林道に新設、拡幅、舗装を行わず、地滑りなどの危険箇所には安全対策を施して利用することが、道路の安定性の確保及びコスト面から考えて最善である。” というものであった。しかし、機構側は、“地表地質調査については、本委員会の検討対象とはしていません。” としか回答していない。

なお、添付資料「細見谷地域十方山林道周辺の地質」中の図表等については、「十方山林道（細見谷林道）すなわち緑資源幹線林道 大朝・鹿野線 戸河内・吉和区間（二軒小屋・吉和西工事区間）環境保全に関する意見書・要望書集」<資料7>の中で別記およびリンクしている

<http://www.akimasa21.net/jippoway/20051214mokuji.htm>

AKIMASA.NET

<http://www.akimasa21.net/>

- 21世紀は環境の世紀 -

緑資源幹線林道大朝・鹿野線 戸河内・吉和区間(二軒小屋・吉和西工事区間) 環境保全調査報告書素案の地質調査報告書についての意見

当方が2002～2003年に、本区間のうち道路の新設が予定されている部分と、その西側の道路の拡幅が予定されている部分について地質調査を行った結果については、既に2003年に林野庁に提出されている。当方の調査結果の概略及び道路改変への評価は下記の通りであった。

航空写真の解析によって、地滑りとされていたところのいくつかには、地滑りをおこした痕跡を示す滑落崖や地滑り粘土の存在が確認された。又、現在の林道の幾つかの箇所には地滑り及び初期的な変形地形の反映と見られる水溜まりがみられた。

特に、現道路を拡幅する予定と見なされている区間の内、今回の調査地域の500mの範囲には地滑りに関連していると思われる擁壁の亀裂が多数見られ、道路面に対して相当な地圧がはたらいていると思われる。

の結果から考えると、道路を拡幅するにあたって法面の安定性を図るためには地形の大改変が必要である。又、地滑り対策工なども必要であり、建設費用及び維持管理費は膨大なものになる。

この林道を高規格化しても、生活道路として利用されることがないため、事業に妥当性があるとは思えない。

道路の舗装については、地滑り土塊を構成する粒子の浸食・運搬を促進するとともに、道路に大きな陥没をもたらすことに繋がる。

現地は豪雪地帯であることから、融雪期における地下水の増大は大きな地下浸食をもたらす。さらに、舗装直下の地下水は冬季に凍結し、舗装に急速な破損をもたらす。以上のことから、現林道に新設、拡幅、舗装を行わず、地滑りなどの危険箇所に安全対策を施して利用することが、道路の安定性の確保及びコスト面から考えて最善である。

この度の貴機構の地質調査報告書においては、当方が「地滑り」とした部分は、単に「斜面崩壊」となっているが(当方の報告書の『細見谷地域十方山林道周辺の地質』に詳細を記す)十分な検討がなされた結果とは言い難い。地滑りでないのならば、納得できるような科学的根拠を示して頂きたい。又、当方がおこなった評価に対しても十分な返答がなされていない。道路新設および拡幅がおこなわれた場合、十分な「安全性」が果たして確保されるのか疑問である。すでに林野庁に提出済みの当方の「細見谷地域十方山林道の地質」を同封するので、十分に検討されるようお願いする。なお、これらの調査報告は2002、2003年の日本地質学会にも報告されている。

広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学教室
崇徳高校教諭

宮本 隆実
古川 耕三

細見谷地域十方山林道周辺の地質

広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学教室
崇徳高等学校教諭

宮本隆実
古川耕三

目次

1. はじめに
2. 地質構成と地質構造
3. 空中写真判読による地すべり分布の解析
4. 地質踏査による地すべり解析
5. 緑資源公団による地質調査結果との対応
6. 緑資源公団による大規模林道計画に対する地形・地質調査結果からのコメント

1. はじめに

岡山県西部から広島県・山口県東部には NE - SW 系の断層が良く発達しており、その中には活断層として指定がなされているものがある（活断層研究会編，1980）。広島県西部の細見谷地域も、このような NE - SW 系の断層が発達するところで断層に沿って谷が発達している（図 - 1 - 1）。しかし、細見谷は、下流部で、ほぼ直交するように屈折して ESE 方向に流れ下っている（図 - 1 - 1）。今村ほか（1959）は、この細見谷の屈折する位置で、NW - SE 系の断層によって切断されていると報告している。そして、今村ほか公表した調査結果によると、細見谷地域は、この NE - SW 系断層の末端にあたる場所とされている。このような調査結果を受けて、中国地方において広域にわたり卓越して発達する NE - SW 系断層群の末端現象を理解するため、筆者らは、細見谷地域の地質を調査してきたのである（古川・宮本，2002）。

しかし、近年、筆者らは、細見谷地域の十方山林道を大規模林道に改変するという計画のあることを知り、この計画が、地域の地質特性に照らし考えて妥当なものであるかどうかを合わせ検討することにしたのである。理由は、調査の過程に、細見谷地域には多くの断層群が発達し、地形が急峻であることもあって、地山が全体として極めて脆弱で弛んでおり、地すべりも発達することを把握してきていたためである。そこで、ここでは、十方山林道を大規模林道に改変するという計画が、地質学的・地形学的に見て妥当なものであるかどうかについての現在までの調査結果を簡潔に述べることにする。この改変計画のために緑資源公団が行なった調査結果（平成13年度大朝・鹿野線「戸河内・吉和区間」第4工区、地表・地質調査業務委託報告書）があるので、この調査結果との比較検討の結果も示すことにする。

2. 地質構成と地質構造

図 - 2 - 1 が、筆者らによる本地域の地質図である。本地域の基礎地質を構成する岩類は、玖珂層群に属するチャ - ト・泥質岩、そして白亜紀の酸性火山岩類である。断層周辺を別にすれば、チャ - トと泥質岩は緩やかにうねりながらもほぼ水平な地質構造を形成しており、厚いチャ - トを挟んで泥質岩はその上位と下位に分布する関係にある。チャ - トより脆弱な岩相である泥質岩は、主として山側の高い位置に分布している。

白亜紀の酸性火山岩類の主体は石英斑岩で、玖珂層群との境界は、南北方向のところで貫入角礫を伴う貫入接触である。これに対し、東西方向は未固結ガウジを伴う断層である。西側の山腹斜面を構成する石英斑岩は、870mより高標高部の多くの地点で、深層風化

を受けている。このため、断層群の発達と急峻な地形もあって、土砂の生産が大きく、西側山腹斜面にある谷には、土石流堆積物が広く厚く発達している（図 - 2 - 2）。この土石流堆積物は、道路の保全の上から留意すべき地質体である。

本地域には、地質図に示されているように、多くの断層が発達している。これらの断層はいずれも露頭で確認されたものであり、多くの断層（e.g. Smith et al., 1990；Scholz, 1990；Antonellini & Aydin, 1994；Goddard & Evans, 1995；Caine et al., 1996）と同様に、未固結粘土ガウジと亀裂岩盤を伴うものである（図 - 2 - 3, 4）。今村ほか（1959）が、NE - SW 系断層としたものは、図 - 2 - 1 の地質図で、F1 で示した断層である。断層に沿った基盤岩の変形は著しく顕著であり、数 m 幅の未固結ガウジと数十 m 幅の亀裂岩盤が認められる（図 - 2 - 3）。F1 以外の断層にも、断層に付随して幅広い亀裂岩盤が発達している（図 - 2 - 4）。断層の交差部はまた一般に変形集中帯であり、複雑な変形の見られるところである（Nicol et al., 1995；Watterson et al., 1998）。このような断層群の発達とその交差部であることを反映して、本地域の地山の弛みは、著しく顕著である。

3. 空中写真判読による地すべり分布の解析

本地域における空中写真判読による地すべり分布の解析は、財団法人深田地質研究所の大八木規夫博士によるものである（古川・宮本，2002）。図 - 3 - 1 が解析結果である。図には滑落崖と移動体が区別して明瞭に読み取れる地すべり地形と、滑落崖と移動体の識別は明瞭ではないが地形の変状が読み取れる初期的変形地形が示されている。

空中写真判読の結果（図 - 3 - 1）によれば、十方山林道に沿って、多数の地すべり地形と初期的変形地形が発達すると言ふことができる。これには、急峻な地形と脆弱な地質が関わっているのであろう。この空中写真判読によって抽出された地すべり地形と初期的変形地形について、ひとつひとつ地質踏査による解析を行なってきた。現在までの調査結果を以下に示そう。

4. 地質踏査による地すべり解析

現在、地質踏査による解析を進めている地すべり地形と初期的変形地形は、図 - 3 - 1 に ~ の番号を付したものである。以下に番号順に調査結果を簡潔に示そう。

空中写真判読によって初期的変形地形として読み取られたものである。地形的に変状があるとされた領域内の上部には、数十 cm から数 m の小崖が観察される。また変状があるとされた領域の下底に近い位置において、基盤岩を被覆する土石流堆積物の変状を示す粘土層（地すべり粘土層）が確認された（図 - 4 - 1）。したがって、この空中写真判読によって初期的変形地形とされた領域は、初期的ではあるとしても地すべり移動体であることは明らかである。この領域直下のチャ - ト層には、図 - 4 - 2 に示されているように、緩やかに川側へ傾斜する粘土層を伴う破砕帯が発達する。この破砕帯は上位の移動体の滑りをもたらした基盤岩の変状（弛み）であろう。

空中写真判読によって初期的変形地形として読み取られたものである。地形的に変状があるとされた領域の下底に近い位置において、地すべり粘土層が確認された（図 - 4 - 3）。したがって、この空中写真判読によって初期的変形地形とされた領域は、初期的ではあるとしても地すべり移動体であると判断される。

空中写真判読によって地すべり地形として読み取られたものである。地表踏査によって、図 - 4 - 4 に示されたような、2 つの地すべり（ - A, - B）に区分されることになった。

- A この地すべりでは、基盤の健岩である流紋岩が、5 m を越える鉛直な滑落崖を形成している。

- B - A の地すべりの滑落崖から連続するように、- B の領域にまで、流紋岩の壁が発達する。この壁から斜面上部には、基盤の健岩である流紋岩の露頭が広く分布するが、それより下位の斜面には岩盤露頭は全く認められない。この壁から二号橋に向かう小尾根の南側に小さな凹みが発達する(図 - 4 - 5)。斜面に発達するこの小さな凹みと壁が、- B の地すべりの側壁と滑落崖である。このことは、- B 地すべりの内部の二次地すべりの滑落崖(図 - 4 - 6)に見られる岩盤性状(土砂状)からも明らかである。道路法面では、この地すべりの側壁に沿った基盤岩の変状も明瞭である(図 - 4 - 5)。

- B 地すべり内部を通る道路法面には、斜面の安定性確保のために擁壁が建設されている。しかし、この擁壁には多数の開口亀裂や変位を示す亀裂が発達する(例、図 4 - 7, 8)。このことは、- B 地すべりが現在活動中であることを示すものである。

空中写真判読によって初期的変形地形とされた領域でも、斜面の安定性確保のために建設された擁壁に、変位を示す亀裂が発達する(例、図 - 4 - 9)。このことは、この初期的変形地形も現在活動中であることを示すものである。

空中写真判読によって地すべり地形として読み取られたものである。地すべり内部を通る道路法面には、斜面の安定性確保のために擁壁が建設されている。この擁壁にも亀裂が発達する(例、図 - 4 - 10)。このことは、この地すべりが現在活動中であることを示すものである。

図 - 4 - 11 は、この地すべり直下の岩盤に見られる強い変状(ダメージ帯)を示すものである。この変状は、鉛直な配置をもった極めて間隔の狭い節理と地すべりの側壁に沿った滑り面の発達として認められる。このダメージ帯でも、地山は、極めて脆弱である。

空中写真判読によって地すべり地形として読み取られたものである。地すべり内部を通る道路法面には、斜面の安定性確保のために擁壁が建設されている。この擁壁にも変位と開口を示す亀裂が発達する(例、図 - 4 - 12)。この地すべりが現在活動中であることは明らかである。

この地すべりには、少なくとも2段の滑落崖が認められる(図 - 4 - 13)が、図 - 4 - 14 の露頭写真の A の領域の崖が、前面の滑落崖である。この滑落崖は B の領域にまで連続して辿られる(図 - 4 - 13)。しかし、ここでは、この滑落崖に沿った滑りは、図 - 4 - 15 の写真に見られるように、1 m 程度であり、B の領域の地形的膨らみが落ち残った地山である。この滑落崖に沿った滑り面は、C の領域の崖において観察される(図 - 4 - 16)。滑り面に沿って白色の粘土層の発達が明瞭である。この滑り面の下位の地山もまた著しく破碎され数条の粘土層も認められ、変状が顕著である。これは、図 - 4 - 13 に示されている後側の滑落崖に沿った地すべりを反映した地山の破碎を示すものである。

擁壁の顕著な変状は、前面の滑落崖に沿った滑りによって地山が滑り落ちた A の領域においても認められる(図 - 4 - 17)。この変状は、図 - 4 - 13 に示されている後側の滑落崖に沿った地すべりを反映した現象であろう。

図 - 4 - 18 と 19 は、この地すべり直下の岩盤における明瞭なダメージ帯の発達を示すものである。この変状は、(5) の地すべりにおけると同様、鉛直な配置をもった極めて間隔の狭い節理と地すべりの側壁に沿った滑り面の発達として認められる。このダメージ帯でも、地山は、極めて脆弱である。

空中写真判読によって地すべり地形として読み取られたものである。道路近くに二次的な地すべりが認められる(図 - 4 - 4)。

二次的な地すべりが認められる位置で、地すべりの下底面が露出している(例、図 - 4 - 20)。この下底面には地すべり粘土層が発達し、その直上の2地点で多量の湧水が認められる。この地すべり下底面は南へ傾斜しており、図 - 4 - 20 の露頭から 10 m ほど

南側では、地すべり下底面は、道路面の下に位置するようになる。この粘土層を伴う地すべり下底面が、道路面より下位となるところでは、道路面に常に水溜まり認められる。ここで、地下水が道路の凹みに、いつも溜まる現象が起こっているのであろう。図 - 4 - 2 1 は、この位置での、道路面上の水溜まりと、道路より上の地すべり土塊中の地すべり粘土層の発達を示すものである。

空中写真判読によって地すべり地形として読み取られたものである。大きな地すべりである。

移動体の南側壁は道路の法面において明瞭に確認された。図 - 4 - 2 2 が、その露頭写真である。地すべり下底面は北へ傾斜している。地すべり下底における粘土層の発達は明瞭である。この地すべり下底面が、道路面を横断する位置より南側では、岩盤の流紋岩が道路面に露出している。これに対して、これより北側の道路面には、(7)の地すべりの場合と同様、地すべり土塊中における地下水の流れと不透水層(地すべり下底粘土層)の存在を反映して、水溜まりが常に発達している(図 - 4 - 2 3)。

5. 緑資源公団による地質調査結果との対応

調査範囲の重なるところでの本調査の調査結果と緑資源公団の調査結果について、対応関係を検討した結果を、以下に簡潔に列記する。

(1) 基盤岩の地質構造

	緑資源公団調査	本調査
チャ - ト層と泥岩層の関係	どこでも高角度断層	緩やかに重なる関係と高角度断層
チャ - ト層・泥岩層と流紋岩の関係	どこでも高角度断層	貫入角礫を伴う接触関係 高角度断層
未固結ガウジを伴う断層	NE - SW 系 NW - SE 系	ENE - WSW 系 E - W 系 NW - SE 系
地山の性状	脆弱	脆弱

(2) 地形の変状 緑資源公団資料の No. 10 地点と No. 19 地点の間 (道路面より上で対応関係検討位置図・図 - 5 - 1)

	緑資源公団調査	本調査
A 地点	変状なし	の地すべり
B 地点	地すべり	調査中
C 地点	斜面崩壊	初期的変状地形ではない
D 地点	斜面崩壊	初期的変状地形ではない
E 地点	変状なし	初期的変状地形
F 地点	斜面崩壊	の地すべり
G 地点	斜面崩壊	の地すべり
H 地点	斜面崩壊	の地すべり
I 地点	変状なし	の初期的変状地形
J 地点	斜面崩壊	の地すべり

本調査では、地すべり地形と初期的変状地形のみを記載し、斜面崩壊は記載から除外している。C 地点と D 地点において、緑資源公団が斜面崩壊とした箇所は、本調査においても斜面崩壊は確認しているが、現在までの調査では地すべり(初期的変状地形)の存在

は確認していない。

緑資源公団は、調査によって、斜面崩壊が確認された上記の諸地点は、道路の建設に際して山腹斜面を切り取ったために起こった切り取り面での変状が、法面上方の自然斜面に波及したものであると結論している。しかし、緑資源公団調査によって斜面崩壊あるいは変状なしとされたA地点、F地点、G地点では、本調査によって、地すべり地形とともに地すべり下底粘土の存在が確認されている。また、H地点とJ地点では、地すべり地形とともに側壁に沿った顕著なダメージ帯の発達を確認されている。緑資源公団もB地点において地すべりの存在を確認している。

A地点からJ地点までの僅か800mの区間に、緑資源公団の調査結果も加えれば、6箇所地すべり地形、2箇所に初期的変状地形が発達する。本地域の地山は、全体として極めて脆弱である。拡幅計画のある林道の残りの区間 現在調査を進めている にも、同じように地すべり地形と初期的変状地形が発達している。

6. 緑資源公団による大規模林道計画に対する地形・地質調査結果からのコメント

(1) 拡幅計画

@多くの地すべり地形と初期的変動地形が発達するため、法面の安定性を確保するには地形の大変更が必要である。

@地山は全体として極めて脆弱であるため、地すべり地形と初期的変動地形が確認されていない箇所でも、法面の安定性を確保するには地形の大変更が必要である。

@地すべり地形・初期的変動地形・それ以外の脆弱な地山に対して、対策工が必要である。

@したがって、建設費用および維持・管理費が膨大なものになる。

@この林道を高規格化しても、生活道路として利用される可能性はない。

これらのことから、事業に妥当性があるとは考えにくい。

(2) 道路の舗装計画

@地すべり土塊中を流れる下水は、地下で、地すべり土塊を構成する粒子を、常に浸食し運搬している。

@A地点の地すべりとF地点の地すべりでは、地すべり下底面が道路横断し、道路面の直下に地すべり下底の粘土層(不透水層)が発達するところで、地すべり土塊を流れる地下水が、地表に湧きだし、道路面に常に水溜まりを形成している。

@舗装は、このような地下水による、地すべり土塊を構成する粒子の浸食運搬を促進するとともに覆い隠すことになるため、道路に大きな陥没をもたらすことに繋がる。

@豪雪地帯であるため、融雪期における地下水の増大は、大きな地下浸食をもたらすことになる。

@本地域は寒冷地であるため、舗装直下の地下水は、冬期には凍結する。この現象は舗装に急速な破損をもたらす。

@これらのことから、舗装化が、無舗装の現林道以上の安全性をもたらすものとは考えにくい。

(3) 現林道の取り扱いについて

@現林道に新設、拡幅、舗装などは行わず、地すべりなどの危険箇所に安全対策をほどこし利用することが、道路の安全性の確保およびコスト面から考えて景善である

引用文献

Antonellini, M. & Aydin, A., 1994, Effect of fluid in porous

- Sandstones : Petrophysical properties. Am. Assoc. Petro 1 eum Geol. Bull.,
Vo 1 .78,355-377.
- Caine et al.,1996,Fault zone architecture and permeability structure. Geology,
Vol.24,1025 - 1028.
- Goddard,J.V.&Evans,J.P.,1995,Chemical changes and fluid - rock interaction
In faults of crystalline thrust sheets, southwestern Wyoming,U.S.A.Jour.
Struct.Geol.,Vo 1 .17,533-547.
- 古川耕三・宮本隆実,2002,広島県・細見谷南西部地域の地質。森と水と土を考える会・
日本
生物多様性防衛ネットワ - ク・吉和の自然を考える会(編)「細見谷と十方山林道」,
8 - 10。
- 今村外治ほか,1959,三段峡・八幡高原地域を主とするいわゆる断層谷の地質学的研究。
広島県教育委員会(編)「三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告」,64 - 83。
活断層研究会編,1980,日本の活断層 分布図と資料,東大出版会,P.363。
緑資源公団,2001,平成13年度大朝・鹿野線「戸河内・吉和区間」第4工区,地表・
地質調査
業務委託報告書。P.98。
- Nicol et al., 1995,Three - dimensional geometry and growth of conjugate normal
faults.Jour. Struct. Geol., Vol.17,235-248.
- Scholz,C.H.,1990, The mechanics of earthquakes and faulting.Cambridge
University Press,P - 439.
- Smith et a 1 .,1990,Intersection of fault zones, fluid flow, and heat transfer at
The basin sca 1 e. in International Association of Hydrogeologists (ed) ,
[Hydrogeology of permeability environments],Vol.2,41 - 67.
- Watterson et al.,1998,Strains at the intersections of synchronous conjugate
fau 1 ts.Jour.Struct.Geol.,Vol.20,363-370.

林野庁長官 前田直登様
独立行政法人緑資源機構 理事長 伴 次雄様
緑資源幹線林道大朝・鹿野線戸河内・吉和区間（二軒小屋・吉和西工事区間）
環境保全調査検討委員会 座長 中村 慎吾様

戸河内・吉和区間 地表地質調査の概要
（平成13年度及び15年度調査結果）
に対する「意見書」

2005年7月5日

- (1) 貴団体の地質報告書の地質図にある ~ 地点について(添付資料参照) 単に「斜面崩壊」と扱い、工法について助言をされているが、この地点については、当方の「意見書」(提出済み)において、2002~2003年に当方が行った地質調査の結果、地滑り粘土の存在や滑落崖などを根拠に「地滑り」が存在する事を指摘していた。これらの地点が「地滑り」であるかどうか、どのような調査・検討されたか、この報告書からは読みとる事ができない。「地滑り」でないと判断されるのならば、その科学的根拠を示してほしい。
- (2) 既設の大規模林道には、道路が崩落によって分断され使い物にならないところもあると聞いているので、地質の検討は道路保全にとって重要な課題と思われる。当方の『意見書』では「現林道に新設、拡幅、舗装は行わず、地滑りなどの危険箇所安全対策を施して利用することが、道路の安定性の確保及びコスト面から考えて最善である」としたが、貴団体の報告書では、工事を行うことを前提として、工法について説明されている。検討を不十分にしたまま、工事を先行させてしまうと、将来に禍根を残しかねない。地質に対する評価を十分に意見交換する機会を設けて頂くようお願いする。又、今までの影響評価の見直し検討委員会の委員には地質の専門家が参加していないと聞いているが、今後加えていただくようお願いする。

広島大学大学院理学研究科地球惑星システム教室 宮本 隆実
崇徳高校教諭 古川 耕三

以上についてのご回答を、7月15日までに下記にお送りいただきますようお願いいたします。

記

原戸祥次郎（住所電話番号省略）

平成17年7月29日

広島大学大学院理科学研究科地球惑星システム学教室 宮本 隆実 様
崇徳高校教諭 古川 耕三 様

緑資源幹線林道 大朝・鹿野線戸河内・吉和区間（二軒小屋・
吉和西工事区間）環境保全検討委員会 座長 中村 慎吾
独立行政法人緑資源機構 森林業務部長 安藤 伸博

2005年7月5日『戸河内・吉和区間 地表地質調査の概要（平成13年度及び平成15年度調査結果）に対する「意見書」』への 回答

緑資源幹線林道大朝・鹿野線戸河内・吉和区間（二軒小屋・吉和西工事区間）環境保全検討委員会は、平成12年度の林野庁の評価において、戸河内・吉和区間の溪畔林部分について環境保全に十分に配慮して事業を実施する必要があるとされたことを踏まえ、第6回委員会に配布した資料-4の1の趣旨に記しているとおり、「緑資源幹線林道大朝・鹿野線戸河内・吉和区間（二軒小屋・吉和西工事区間）の環境保全調査のとりまとめにあたり、林道工事の実施に伴う影響の予測・評価及び保全措置を専門的、学術的な見地から検討する」ため、緑資源機構が設置しているものであり、緑資源機構がいわゆる防災上の観点から平成13年度及び平成15年度に実施した地表地質調査については、本委員会の検討対象とはしていません。